

偽ディオニュシオス・アレオパギテスについて

今 義博

はじめに

簡単な資料が皆様のお手許に渡っていると思いますので、それを見ながらお話を進めさせていただきます。

いまからお話する人物は、日本ではディオニュシオス・アレオパギテスとかディオニュシウス・アレオパギタと呼ぶことが多いですが、この人物はギリシャ教父ですので、正しくはギリシャ語でディオニュシオス・ホ・アレオパギテスと言います。この名前の中にある「ホ」はギリシャ語の定冠詞であります。ですから、

英語でも *Dionysius the Areopagite* というふうになります
が、長い中世の時代、ラテン語でディオニュシウス・アレオパギタと呼ばれてきました。ラテン語には冠詞というものはありませんので、ギリシャ語の「ホ」という冠詞の部分が省略されてローマ字では *Dionysius Areopagita* というふうに表示されるわけです。

日本では、これを表記する場合にラテン語に倣って定冠詞を省いて、しかもギリシャ語の発音に忠実な表記をして「ディオニュシオス・アレオパギテス」とすることが最近多くなってまいりましたので、私もそう

いう流れに従いました。ただし、正式にきちんと名前を表記すると、ディオニュシオス・ホ・アレオパギテスと呼ばなければならないということです。

以下、「偽」という言葉は省略させていただいて、「ディオニュシオス」と呼ぶことにしたいと思います。

1 使徒パウロの弟子

この人物は一体どういう人物かということですが、まず一番目に「使徒パウロの弟子」です。古代のキリスト教の指導者たちの中に「教父」と呼ばれる一群の人々がいて、ディオニュシオスは、その教父の一人とされています。

「教父」というのはどういう者を指すのかということですが、キリストの直接の弟子は「使徒」と呼ばれ、キリストの教えを方々に広めた人たちです。このキリストの直弟子及び孫弟子、その辺りまでのキリスト教の指導者たちを五世紀の半ばころから「教父」と呼ぶようになりました。やがてキリストの孫弟子よりも後の時代のキリスト教指導者たちも含めて「教父」と呼

ぶようになり、現代でも、そういう呼び名が使われているわけです。

その中でも、特に「使徒教父」という呼び方があります。これは比較的新しい呼び方で、一七世紀後半から使われはじめました。どういう人たちを指すかと言え、いま触れましたようにキリストの直弟子、あるいは孫弟子に当たる、そういう第一世代、第二世代のキリストの弟子たちが「使徒教父」と呼ばれることになります。

ディオニュシオスは、パウロの弟子だったので「使徒教父」と呼ばれるわけですが、実はパウロはキリストの直弟子ではありません。ご存じの方も多いと思いますが、パウロはユダヤ人としての名前、つまりヘブライ語の名前は「サウル」で、サウルはギリシャ語ではパウロというふうに発音されます。イエスが既に磔にされて死んでしまった後、キリスト教を弾圧するユダヤ人の先頭に立っていたのがこのパウロでありました。パウロがキリスト教の弾圧に向かう途中、砂漠の中で神秘的な事態に出会うわけです。それは、辺りが



暗くなって見えなくなって、天からキリストの声が聞こえて来る。そして、パウロは目が見えなくなったまま、キリストの言うとおりに目指す街まで行って、目の処置をすると、目が見えるようになった。そして、「お前は私の教えを世の中に広めなさい」というふうなことをキリストから言われるということがあり、結局、パウロはキリスト教徒に転向しました。

当時、異教徒の間、つまりユダヤ人以外の人々の間にキリストの教えを広めるために三回もの大旅行をした人物、これがパウロです。ですから、パウロは直接のキリストの弟子ではなかったわけです。直弟子というのは十二人おりました。しかし、パウロはそういう神秘的なキリストとの出会いを経て弟子になったと見

「アテネの最高法院の裁判官たち」(1605年)。オランダの画家ウィレム・ファン・スワーネンブルフによる版画。使徒パウロは2回目の宣教旅行でアテネにも足を運んだ。「使徒言行録」(17章)によると、パウロはアテネの最高法院であったアレオパゴス「アレス神の丘」法院(評議会)で説教した。このときキリスト教に入信した一人が、裁判官であったディオニシオスであった

なされますので、パウロのことを後に「第十三番目の使徒」という言い方がされるようになります。ですから、パウロという人は直弟子ではなかったけれども、直弟子扱いをされた人である。そして、その直弟子扱いされた人の弟子がディオニュシオスであったので、ディオニュシオスも「使徒教父」の一員であるということになるわけです。

2 デイオニュシオス文書

「ディオニュシオス文書」と呼ばれるものがあります。これは、Corpus Dionysiacumと言われたり、あるいはCorpus Areopagiticumと言われたり、あるいはCorpus Dionysiacum Areopagiticumと長たらしく言われたりしますが、こういうふうには呼ばれる文書が現在まで伝えられております。それは四つの論述と書簡から成っております。

四つの論述というのは『神名論』『天上位階論』『教会位階論』『神秘神学』という著作です。これらの著作は、六世紀初めに突然現れます。これらの著作について、

それまでキリスト教の世界の中で誰も言及したことがないし、いかなる伝承もなく、引用した人は誰もいなかったわけです。それが突然、現れてくるわけです。

ですから、この著作が初めて世に現れたときは、この著作は真作か偽物かが問題となり、「偽物だ」とする意見が多かったわけです。しかし、六世紀半ばにスキュトポリスのヨアンネス、ヨアンネス・フィロポノス、こういう人たちが、「この著作は本物だ」と擁護する。西洋ではギリシャ語を話す人たちの地域を東方と言いますが、ラテン語を話す地域を西方と大きく分けていきましたが、決定的なのは、その東方教会の中で七世紀に大物の教父が現れます。「証聖者マクシモス」と言われるようになる人物ですが、この証聖者マクシモスが、「ディオニュシオス文書」について注解を書き、そしてその教えを擁護し、自らもその影響を受けて著作をなすということがあって、以後、東方教会ではディオニュシオスの著作が広く浸透していくわけです。

それに対して、西方のラテン語の世界では、九世紀になってエリウゲナという人物がディオニュシオス文

書の全部をラテン語に翻訳します。これが、最初の完全なラテン語訳です。そして、時代を経て一二世紀以降、ディオニュシオスは、サン・ヴィクトルのフーゴーとか、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクイナス、マイスター・エックハルト、ニコラウス・クザーヌス、こういう西方の思想界の中で重きをなした人々の間に大きな影響を与えていくことになります。

とりわけ、ディオニュシオスはパウロの直弟子だったという点が一番大きい要因ですが、その思想内容の深さ、そういうものによってキリスト教界の中で非常に高い権威を認められていきました。中世では、「ディオニュシオス文書」は『聖書』に次ぐ権威をもつようになります。『聖書』に次ぐ権威というのはまさに絶大な権威でありまして、彼の著作の真作性について疑うということはほとんどなかったわけです。ところが、イタリヤ・ルネサンス時代になると、ロレンツォ・ヴァッラという人が、「この著作は偽物ではなかるうか」ということを言い出します。それからエラスムスなどを筆頭にする人文主義者たちが、「やっぱ偽物だろう」と

いうことを言います。ルターなんかその勢いに乗って、カトリックの側を攻撃する意図から、「ディオニュシオス文書」を批判するということを行ったりします。

しかし、一般にはまだ概ね「この著作は真作である」というふうに思われていました。ところが、一九世紀の末に二人の研究者が互いに独自の研究成果を発表します。それが、両方とも奇しくもほとんど同じ内容で「偽作だ」ということを実証してしまっただけです。この論証の内容をごく簡単に説明しますと、ディオニュシオスの使っているギリシャ語はかなり独創的なギリシヤ語です。ギリシヤ語というのは古くはホメロスの時代から段々と時代とともに文法も語彙も、動詞や名詞や形容詞の変化等々、少しずつ変化していくわけです。ディオニュシオスは神学・哲学の概念語として非常に新しいものを使っている。つまり、五世紀半ば頃に初めて使われ出したギリシヤ語の用語法、そういったものが使われています。ちょうどそのころに、プラトンの開いた学校であるアカデメイアの学頭をしていたプロクロスという人物がいますが、このプロクロスの

使っているギリシャ語の表現と内容的にも言語的にも非常に共通したものが、かつ思想的にも軌を一にする点が幾つも指摘されたわけです。それで、紛れもなくディオニュシオスはプロクロスと何らかの接点があったはずだということになりました。

ですから、ディオニュシオスは自分の著作をなすに当たって、プロクロスの講義を直に聞いたか、あるいはプロクロスの著作を直に読んだか、この二つのいずれかに違いないということになるわけです。プロクロスは五世紀半ばに著作していますから、そのプロクロスの用語や思想を色濃く反映している著作の著者ディオニュシオスはパウロの時代の人物ではあり得ないということになったわけです。それで、それ以後、ディオニュシオスはその名前では呼ばれることはなくなつて、「偽ディオニュシオス」、偽者のディオニュシオスというふうと呼ばれることになったわけで、一般的な呼び方はそういうふうになっています。

それで、日本語で表記する場合は「偽ディオニュシオス」となる。ところが、しばらく前からこの「偽」

に代えて「擬」の字を使う人たちが現われるようになってきたわけです。そして、若い研究者の中には「擬」のほうの字、これが新しい傾向だから、これに従うという人が出て来ています。これは漢字に対する知識の不足と言いますが、完全な誤りです。

なぜそれが誤りかということをやディオニュシオスとは別の人物の事例を使つて説明すると、イタリヤ・ルネサンスの時代のプラトン研究を大いに刺激した研究者がいました。彼はプラトンに心酔して、自らもプラトンと名乗りたかつたようなのですが、しかし、プラトンと名乗つたら、あまりにもおこがましいということで、プラトン (Platon) に似せた名前前でプレトロン (Platon) と名乗りました。この場合、プレトロンはプラトンを擬しているので、プレトロンはプラトンの擬名です。つまりプレトロンは擬プラトンです。ところが、ディオニュシオスは、ディオニュシオスという名前そのものを使っています。この場合は「擬ディオニュシオス」ではない。「偽」を使わないと、漢字の表記としては間違いです。これは、本質的な問題から逸れましたが。

もう一つ簡単に補足しますが、なぜ偽書を作ったかという問題があります。西洋ではヘレニズム時代から中世にかけて、おびただしい偽書が作られました。西洋ではデクラマチオ (Declamatio) といいますが、これは修辭法の一つで、有名な故人、非常に偉大な故人、そういう方の名前を騙って著作を書くというのが、一つの修辭法として広く行われていました。これは、必ずしも読者を騙そうというような悪意があるわけではなくて、あくまでも自己表現のスタイルの一種です。それを、修辭法ではデクラマチオと呼ぶわけです。ですから、このディオニュシオスを名乗った人物も、当時流行った手法で著作をなしたということが言えます。この偽ディオニュシオスは本物のディオニュシオスになり切って書いていて、本物のディオニュシオスは第3節の「伝説」のところでご説明しますが、パウロの弟子ということになっている通り、本当にパウロの弟子になり切って文書を書いています。ディオニュシオスの書いた著作の中には、彼がどのような人物であるかを自分で説明しているところが何カ所もあります。

そこに出てくる代表的なものとしては、「ヨハネ福音書」というのが『新約聖書』にあつて、それを書いたのは使徒のヨハネ、あるいは福音書記者のヨハネというふうに普通言われていますが、この人物のことを彼は直接知っているとどう筋立てになっています。

そして、こういう言葉があります。「わたし(ディオニュシオス)は神から知らされて語っている…あなた(ヨハネ)はバトモスの牢獄から解放され、小アジアの地へと戻り、そこで善である神に倣い、あなたの後に来る人々にそれを伝えるでしょう」と言つて、当時、ヨハネは牢獄にいた筋書きになっています。「しかし、その牢獄からいつか解放されるであろう」とヨハネの将来を予言することまでしています。

もう一つ、その次にはイエスが処刑されたときの証言として、『聖書』の中にある言葉を使つて、「救い主が十字架に架けられたとき起こった日蝕について…當時わたしたちはヘリオポリス(当時カイロ近郊の都市)と一緒に滞在していましたが、月が太陽を通常とは異なる仕方で隠すのを目撃しました」というふうに言つて

いるわけですから、ディオニュシオスはイエスが処刑されたそのとき自分も日蝕を見たと言っているわけですから、使徒ペトロ、それからイエスの兄弟のヤコブ、この二人とある集会で同席したということも証言している。しかし、さっきも言いましたように彼の書いたとする著作のギリシャ語の新しい特徴からして、彼がこの時代に生きていたはずはありません。こういうふうには偽ディオニュシオスは自分が名を使って書いた人物になり切つて著作をしているということです。

3 デイオニウシオスの伝説

ディオニウシオスについては複雑なわく・伝説があります。さっきも言いましたように彼がパウロの弟子だということで、大変権威の高い人物ということになつているために、後世に様々な伝説が生まれます。それを、幾つか紹介します。

トゥールのグレゴリウスという人の書いた『フランクス史』（六世紀）という歴史書がありまして、これには

三世紀の半ばごろにディオニウシオスという人物がガリアに派遣されて、パリの司教になつたが、首を斬られて殉教した、とある。この人物はパリの最初の司教だつたとされています。ですから、いまでもパリの守護聖人というのはディオニウシオスです。このディオニウシオスが『ディオニウシオス文書』の著作と混同されることになりません。

この首を斬られて死んだという話に、さらに尾ひれが付いて、ほぼ同じような時代に『聖ディオニウシオスの受難』が書かれます。これによると、ディオニウシオスはパリの司教になつた後、二人の弟子とともにメルクリウスの丘（現在のモンマルトの丘）で殉教する。ところが、首を斬り落とされた直後に彼は立ち上がり、自分の首を手を持っておよそ2マイル歩いて倒れたと言います。そして、その遺骨がサン・ドニ修道院（パリ郊外にある）に移され、埋葬されたことになつています。この、首を斬られた後に、自分の首を持って歩いたという伝説は大変有名です。

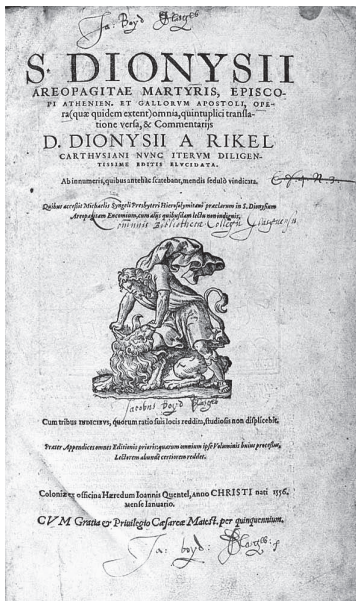
九世紀になると、ヒルドウィーヌスという人物がい

ますが、サン・ドニの修道院長もしました。サン・ドニの修道院というのは西フランク王国の国王直属の修道院ということになっていて、サン・ドニ修道院長というのは、当時の西フランク王国全体の宗教行政を司る役割を担っていたとされています。このヒルドゥイーンヌスという人物は大変な野望家で、当時の国王はシャルル禿頭王（シャルル二世）で、自分の親戚筋に当たる人物でしたが、その国王を亡き者にして自分が国王になろうとクーデターを起こすなど、いろいろな権謀術^{けんぼうじゆつ}を企てた男です。

このヒルドゥイーンヌスが「自分がディオニシオスの伝記を発見した」と偽って、自分が脚色した新しいディオニシオスの伝記『聖ディオニシオスの生涯』を作りました。それによると、ディオニシオスはパウロの直弟子で協力者であった。それから、アテナイとパリの司教をやった人だ。全ガリアの使徒であった。ガリアというのは、当時、今日で言うフランス全域をほぼ指す言葉です。また、教皇代理も務めた。そして、パリで死んだ殉教者である。それで、サン・ドニ修道

院の守護聖人になった人である。そういうフィクションに加えて、そのディオニシオスは、「ディオニシオス文書」の著者であると説明するわけです。しかも、『聖ディオニシオスの生涯』は神の導きによってパリの

ある隠れたところから発見されたと書いています。もう一つ、「ディオニシオス文書」は、さっき申しましたけれども、イタリア・ルネサンスのころからたびたび疑いをかけられたとお話ししました。その理由ですが、ディオニシオスは自分の著作が七つあると



1556年、ケルンで発刊されたディオニシオス文書の表紙

してその書名を挙げているのですが、それらの断片も伝わっていないし、七つの本の題名に関する他の人からの言及が一つもありません。古典に関する関心が高まる中、イタリア・ルネサンスの知識人たちの中には疑いを懐く人たちも出てきたわけです。

4 デイオニュシオスの神学

デイオニュシオスの神学、彼の宗教思想に入ります。ギリシャ語の「テオロギア」は英語の *theology* の語源です。それを今日「神学」と訳してはいますが、「テオロギア」は、デイオニュシオスの時代には、デイオニュシオスだけではなくて、しばしば文字どおりのギリシャ語の意味で理解されることが多かったわけです。どういう意味かというと、聖書そのもの、あるいは聖書に記されている言葉が「テオロギア」でした。それから「テオロギス」は、「神学者」と今日訳すことが多いわけですが、これはデイオニュシオスでは旧約聖書に登場するモーセや預言者たちのことを指し、また新約聖書の福音書の記者とか、パウロ、こういう人たちを指

しています。

稀に、いわゆる今日言うところの神学者、あるいは神学という意味に近いような使われ方をしたこともあります。一応デイオニュシオス文書での「テオロギア」「テオロギス」の意味はそういうことです。しかし、便宜上、時々テオロギアを「神学」、あるいはテオロギスを「神学者」というふうに置き換えて説明させていただきます。

それからデイオニュシオスは『聖書』の言葉は聖職者が神の霊から与えられた力によって書いたものだと繰り返し言うわけです。ですから、『聖書』の言葉は神の神性を何らかの形で開示しているものだということになります。

デイオニュシオスの神学の体系

デイオニュシオスの神学の体系について大まかな枠組みをお話しします。ほぼ彼の用語については訳語が一定しているので、日本語でお話ししていきます。神学の内容の組織と言いますか、体系は、「肯定神学」、「否

定神学」、「神秘神学」、この三つで構成されていると見
ていいと思います。

まず肯定神学ですが、もう一つディオニュシオスは
「象徴神学」という言葉も使っていますが、これは肯定
神学の中の一部分が象徴神学であるのご理解いただい
ていいと思います。

肯定神学についてですが、ディオニュシオスは著作
の本文では「肯定神学」という言葉を実は一回も使っ
ていません。ところが、「否定神学」という言葉はちゃ
んと著作の中で使っています。そして、ディオニュシ
オス文書には確かに「肯定神学」という表現はないの
ですが、内容として「肯定神学」と言われるべきもの
はあり、この否定神学と一対のものとして、ある意味
で対立的なものとして使われています。しかも彼は肯
定という言葉とほとんど同意義の言葉を使って肯定神
学を説明してもいるのです。

ディオニュシオスの神学を受け入れて、それを世の
中に広めるのに貢献した証聖者マクシモスという人物
のことをお話ししましたが、この人はディオニュシオ

ス文書では明記されなかった「肯定神学」という言葉
を述語としてきちんと表に出して使い出すわけです。
それ以後、「肯定神学」と「否定神学」という言葉が定
着していくわけで、ここでも説明を便宜上「ディオニ
ュシオスの肯定神学」としますが、これは実質的な内
容としては存在しているけれども用語として彼は使っ
ていないということをご理解いただきたいと思います。

それともう一つ、三番目の「神秘神学」というもの
があります。肯定神学、否定神学、神秘神学の三つの
神学の相互関係がディオニュシオスの神学の体系をな
すことになっています。

まず、肯定神学と否定神学というのは思想史的に一
体どこから起こってきたかという点、これらは非常に
古くからあります。こういう言葉は文字通りには使わ
れていませんが、内容的には肯定神学、否定神学と言
われるべきものは非常に古くからあった。肯定神学と
否定神学が一対の対立するもの、相関するものとして
はつきりと自覚されて、やがてそれが概念として、言
葉として定着していく。そのもとなった出発点は何

かというところ、プラトンの『パルメニデス』にある議論です。

どういふことか簡単に説明しますと、プラトンの『パルメニデス』の中に「第一仮定」「第二仮定」と、今日研究者が整理して呼んでいるものがあります。その第一仮定というのは、「もし一者が有るとすれば、一者はいかなる者でもない」、そういう結論が導かれる議論です。この議論から展開されてきて、それが神学に結び付いて出てきたのが否定神学です。それから、プラトンの第二仮定、それは、「もし一者が有るとすれば、一者はすべてのものである」、これは第一仮定と全く逆です。この第二仮定についての議論が様々になされて、その結論として神学と結び付いて出てくるのが肯定神学であるということになります。

否定神学というものは萌芽的には様々な形をとって非常に古くからありますが、これが様々な歴史の経緯を経てだんだん整理されたものになっていきます。そして、ほとんど理論的にもよくまとまった形としてそれを確立したのがプロティノスという人物です。この

プロティノスにおいて「一者」は最も根源的なものですが、これはあらゆる名前を超えているから名前の付けようがない。だから、彼は「かのもの」と呼ぶだけです。「一者」というのは仮に付けた名前であって、本当の名前ではないというわけです。

プロティノスは、「かのもの（一者）は何ものでもなく、自己のためには一切を必要としない。かくて、もし君がかのものを言表し、あるいは表象しようと欲するならば、他の一切を除き去れ」と言います。それから「かのもの（一者）自身は言葉と知性と知覚を超えたものである」と言います。結論として、最も根源的なものに対して我々人間が取ることのできる態度は、否定する、あるいは除去することなのだと言っています。

これは私の解釈なのですが、哲学史的に重要な指摘だと思えます。プロティノスは、著作のあるところで、肯定神学、否定神学、神秘神学という三つの神学が相互に関係をもつて一つの神学として全体を構成することを既に構想しています。プロティノスの創始した哲

学の学派を新プラトン主義と呼んでいますが、新プラトン主義の中でプロティノス以降、三つの神学の方向が徐々に整備されていくわけです。

そして、プロティノスからだいたいぶ時代を経て、しかし、プロティノスの伝統がずっと受け継がれてきたなかにプロクロコスという人が出て来ます。この人は後期新プラトン主義者の代表とされますが、この人が、否定と肯定という言葉ではありませんが、否定と類似という言葉を使い分けて神学のあり方を整理するということをやっていく。この否定と類似という言葉はほとんど否定と肯定と置き換えてもいらいの同義的な言葉です。そして、このプロクロコスの影響を非常に強く受けたのがディオニュシオスです。

少し前後しますが、肯定神学というのは神を讃えるため、あるいは神に接近するためにはどうすればいいかということで、神に関して肯定的なこと、積極的なことを述べる。最も積極的な表現の一つは、例えば、「神は存在するものである」とか、「神は第一の存在である」、「神は知恵である」、「神は力である」、「神は全能

である」、「神は最も美しいものである」、「そういうふうな表現です。それに対して、否定神学は、神に対するそういった肯定された言葉をことごとく否定していくことになるわけです。

いまからの説明は錯綜を招くかもしれませんが、肯定神学と否定神学の二つに対して神秘神学はどういう位置に立つかということを簡単に説明します。「トリアス」という言葉があります。トリアスというのは新プラトン主義の中で非常に発達した概念です。どういふものかというところ、それぞれ異なる三つのものがあつて、しかも、この三つの異なるものが一体をなしているという構造をもつもの、これをトリアスと言います。日本語で訳すときは「三一性」と言います。トリアスは、キリスト教で言う三位一体という言葉と同じで、その元になったものです。三位一体という概念は新プラトン主義のトリアスというものがなければ生まれてこなかったのでありまして、新プラトン主義はいろいろな仕方でキリスト教の重要な概念に対しても大きな影響を与えているわけです。

ディオニュシオスもよく使ったトリアスには様々なものがある、その一つに止留、発出、還帰というトリアスがあります。これは、原因と結果の間の関係として捉えられたトリアスです。止留というのは、原因が結果を生み出す前の、結果と無関係なそれ自身。結果と無関係なので原因とさえ呼ばれません。神は止留するものだ。そういう神は、万物から超存在的に隔絶して隠れていて、すべての名前を超えている「無名なもの」である。いかなる対他的関係ももたない、神そのものとしてのあり方をしているのが止留する神です。「神は万物を創った」というのがキリスト教の教義ですが、万物を創る以前の神を「止留する神」として捉えます。したがって、肯定神学や否定神学が届かないところ、つまり、無知と沈黙のうちに神に関わる神学、これを扱うのが神秘神学ということになります。この言葉を、ディオニュシオスはちゃんと使っているわけです。

それから、発出は因果関係が成り立つ場面です。つまり、原因が結果を引き起こすことが発出です。キリ

スト教の教義で説明すると、神は万物の原因として万物を創造する。つまり、神は万物へ発出して、万物として顕現する。だから、発出とは、神が世界に現れたということですが、これを「神現」と呼びますが、ここで神と世界（被造物）との間に因果関係が成立するわけですが。

もう一つの還帰ですが、神は結果を引き起こした。そして、自分が引き起こしたこの結果を原因である自分自身に関係づける。これが、還帰です。神は自分が創造した万物を自分に向けて集め、統一していく。そして、自分の内に神化して完成していくわけです。

しかし、発出は一なる神の万物への差異化あるいは多様化です。還帰というのは、一なる神への万物の統一化、同一化です。発出と還帰、この二つの相にある神は人間の側から万物との因果関係のうちに捉えられた神です。ですから、人間の考える因果関係に基づいて神を肯定したり、あるいは否定したりする。そういうところから肯定神学と否定神学というものが起こっているということになるわけです。

重要なことなのですが、神について肯定するにせよ否定するにせよ、ディオニシオスは「神学」という言葉の中に、神を賛美するという意味を盛り込んでいます。だから、神学というのは単に感性を使ったり理性を使ったり、知性を使ったりして神に関わるというだけではなくて、実存的に神に関わって神を賛美する。否定する場合でも、神についてあらゆることを否定するわけですが、その否定も神を賛美する一環なのだという面があります。

ディオニシオスの肯定神学の著作の構想

ディオニシオスの著作の構想、これについては彼が自分の著作の中で述べていますが、それを簡単にまとめると、『神名論』という著作のなかで、非感覺的あるいは知性的な神の名前を論じています。『神名論』はそういう役割を荷っている書物とされています。もちろん、そういう方面だけではなく、様々な面についても議論されている著作ですが、主眼がそういうところに置かれているということです。

それから、彼は『象徴神学』という著作を書いたとしていますが、これは現存しません。研究者たちは、「それは、彼のつくったフィクションだ。つまり、つくってもいない著作だけれども、できれば、そういう著作を物しなかったのだろう」と考えています。『象徴神学』も肯定神学を扱う著作の一つとされていて、それも可感的事物に基づいて付けられた神の名前を論じる、そこに主眼が置かれている著作だというわけです。

次にディオニシオスにおける肯定の逆説という考え方に触れます。ディオニシオスには、神には肯定することは相応しくない、神には似つかわしくない表現のほうがかえって相応しい、相応しからぬもののほうが似つかわしいものよりも我々の知性を神のほうへ引き上げる、という、面白い考え方があります。これは、神を肯定するのに「神は何々のようだ」というように、我々の理解からすれば非常に高度なものを、非常にレベルの高いものを神に付与するということをして神を讃える。ところが、いくら神は万能であるとか、神は真理であるとか、神は存在そのものであるとか言っても、

そこで使われている賛美の言葉は全部人間が考え出したものに過ぎない。神は人間のあらゆる思いや言葉を超えているのであって、いくら褒めても我々の言葉や思いは及ばないのだ。そういう言葉や考えを超えている、そういう超越性を我々はどうやったら表現できるかという、むしろ神には似つかわしくない表現のところが神には相応しいのだということを彼は言います。これも、大変面白い考え方です。

肯定神学は神を段階的に非常に低いもの、石ころ、あるいは虫けらというような段階からだんだん高いもの、要するに、我々の世界の中で認識されるより高度なものを段階的に上昇しつつ神に結び付けていくわけです。最終的に、「神は真実のものである」とか、「真理そのものである」とか、最高度なところへ上昇していくわけです。そういうふうな肯定神学が神へ向かって上昇するというプロセスと、ヒエラルキア（今日ヒエラルキーと言っていますが、この言葉を初めて使ったのはディオニュシオスで、これはディオニュシオスの新しい造語です）。このヒエラルキアは地上界の中にもあるし、地上を越

えた天上界つまり天使の世界にもある。ヒエラルキアについては、『天上位階論』の「位階」というのがヒエラルキアの訳語です。『天上位階論』でディオニュシオスは天使のヒエラルキアを語っています。『教会位階論』という著作で、教会のヒエラルキア、地上の、特に教会を中心にしたヒエラルキアについても彼は述べています。

大きく分けて、地上のヒエラルキアと天上のヒエラルキアの関係はどうなっているかというと、プラトンのアイデアとこの世の感覚的な事物との関係とほとんど同じで、つまり、天上のヒエラルキアの写し、あるいは象徴が地上のヒエラルキアになる。ですから、この地上の象徴、地上に現れているもののヒエラルキアを段階的に辿っていけば、やがて天上のヒエラルキアに至る。それを辿っていけば、最終的に神の次元領域に入っていくという構想です。ですから、肯定神学は、レベルの低いものから始まり、レベルの高いものへ向かって段階的にヒエラルキアを辿っていき、最終的に神のところへ到達しようという神学です。そういうこ

とがなぜ必要かという点、「我々の知性は物質的な導きなしには天上のヒエラルキアに昇っていけないのだ。感覚で捉えることのできるものを通して、知性で捉えることができるもの、聖なるものを表す象徴をもとにして、天上のヒエラルキアの純一なる頂にまで我々を引き上げるのだ」ということだからです。ですから、肯定神学のプロセスは、彼が構想したヒエラルキアというものに即応しているわけです。

それから、ディオニュシオスには、因果関係についての独特の考え方があります。実は彼だけに独特ではなくプラトニズム、プラトンの思想の伝統の中では脈々と生きている考え方があります。抽象的に言うと、結果の原因は結果を超えているということです。つまり、原因は存在論的に結果よりも上にある。だから、原因は結果の内にはない。人間という存在の原因は、人間の内にはなくて、人間を超えたものが人間をつくったのだという考え方です。ですから、感覚的なものの原因は、感覚的なものを超えたものである。つまり、知性的な次元領域にあるものだ。知性的なものの原因は、

知性的なものの次元領域にはない。知性を超えたところにあるはずだ。つまり、結局、この世界の一切の原因は神の次元領域、神の側にあるということになるわけです。ディオニュシオスにおいては、結局、神が万物の原因であって、神は知性的なものを創り、感覚的なものも創った。そういう因果関係があるわけです。万物の原因である神を探求する、これは感覚的なものから始めるわけですが、やがてはその感覚的なものをすべて否定することによって、より上位の知性的な世界へ行く。そして、知性的な事物を探求し尽くすと、知性的事物をすべて否定することによって神の次元に入っていく。神的事物として、一なるものの「一」、それから聖霊の三一性、聖霊性、子性、父性、善、知恵、こういうものは神に関わる最高概念とされていますが、これが神的事物というものです。否定神学ではこういうものも否定します。つまり、肯定から否定へ進み、否定の道を最高段階にまで行くと、我々のもっている神についての最高概念もことごとく否定して、神そのものへと向かっていくということになります。それは、

概念、思い、言葉というものを超えた神そのものの次元領域への接近です。

肯定神学は神へ向かって進んでいきますが、神を肯定することは、たとえ最高概念をもつてしても、神を人間の考えや言葉で限定するに過ぎません。無限なる神を限定する肯定神学は行き詰まらざるをえません。無限なる神へ更に一步を進めるには否定というものを媒介しなければならぬわけです。否定のほうが肯定よりも勝っている、否定のほうがより力があるとディオニュシオスは言います。しかし、否定し続けて行くと、最終的に否定し尽くした後には、否定すべきものは何もなくなくなるわけです。それが否定神学の限界です。そこから先が闇の世界になって、神秘神学の領域になるわけです。

ディオニュシオスにおける否定の意味と表現についての考えを紹介します。これもまたディオニュシオスらしい面白いものです。「否定」という言葉は、しばしば「除去」と同義的に使われます。それから、否定を直接的に表現するのではなく、「過剰」という種類の言

葉を使う。それから、「先行している」という意味を表す言葉、あるいは、「優越している」という意味を表す言葉を使う。そういう様々な表現や概念を駆使して、彼は否定を表現するわけです。否定は、様々な仕方肯定を否定して肯定を乗り越えていくわけです。

「無知性」というのは面白い言葉で、文字通りには、知性が無いということですが、そういう意味ではありません。ギリシャ語のアルファベットの最初の「アルファ」ですが、これは「ア」と発音されて、単語の頭に接頭辞として付けられて、「何々が無い」ということを意味する欠性辞として使われることがあります。ギリシャ語ではこれを使った造語が非常に簡単で、彼はそれを駆使して、否定を表す言葉を造語しています。例えば「アヌース」という言葉は文字通りに訳すと「無知性」となりますが、これは知性が無いということではなく、知性を超えていることを表現します。知性が欠けているのではなく、知性を超えているということ表現するのに「無知性」という言い方をする。「無理性」も同じです。これは理性が欠けているということ

ではなく、理性を超えているという意味です。

彼の否定表現には反語的な表現もあります。つまり、否定が自らの否定作用自身をも否定して否定を乗り越える用法です。ただ否定するだけだと単純でわかりやすいですが、言葉の否定作用そのものもその言葉で否定していく。だから、否定の否定みたいな形になるわけです。例えば「不完全」については、我々の普通理解するところでは「完全性が欠如している」という意味ですが、彼の言う「不完全」は「完全以上」ということです。つまり、彼のいうところの「不完全」は完全ということの枠外にあること、完全ということを超えている、ということなのです。

「神の愚かさ」は『新約聖書』のパウロの書簡に出てくる言葉ですが、肯定神学では使いません。神は最も賢明で知恵があるというのが肯定神学の立場ですが、「神の愚かさ」という表現をパウロが使っています。これをディオニュシオスが解釈して、つまり、我々の理解する「賢さ」を否定して、「賢さ」を超えていることとして捉えている。つまり、「神の愚かさ」というのは

賢明さ以上のものということを意味しています。

あるいは、ディオニュシオスは神に対して「見えない」という言葉を使います。普通の我々の考えだと、ある対象が見えないということになります。これが神に対して適用される場合は、「見え過ぎていて」「きわめて明瞭である」という意味です。それから、「言い表し難い」というのは、「無限の言い表しができる」ということです。神には「名前がない」、神は「名前をもたない」という表現をしますが、これは神は「無数の名前をもっている」ことを意味します。「神は捉えられない」と言いますが、「神は万物にありありと現存している」ということです。「目の前の石を見る、木や草を見る。そこに神は見えていてではないか」ということを言うために、「神は捉えられない」と言うわけです。「神は探し出せない」というのは、「万物に神は見出される」ということの表現です。

「闇」というのは、光の過剰のことです。つまり、あまりにも光があつて明る過ぎて我々の視覚を超えている。我々が光を感じる限度を超えて明るい場合には、

全く見えない。モーセがシナイ山に登って、神に出会

って神の言葉を聞く場面が『旧約聖書』にあります。

神が現れると真っ暗になって何も見えない。それを、

神の光があまりにも強過ぎて目が眩んで見えなくなっ

ているのだと解釈している。これはディオニシオス

以前のアレキサンドリアのクレメンスとか、ニュッサ

のグレゴリウスとか、そういう先輩たちの解釈に依拠

しています。また、「知性にあらざる知性」とか、「語

られざる言葉」とか、一見すると解釈に迷うような表

現があります。以上のような捉え方で考えていただ

ければ、理解しやすいかと思えます。

神秘神学について少し付加的な説明をします。「魂の

完成」というものがどのように考えられているか。こ

れは、キリスト教のギリシャ教父の伝統の中にあつて、

やがてラテン教父の中にも浸透していく考え方です。

三つに段階分けされて、ディオニシオスの場合はヒ

エラルキアの秩序に従って、まず魂は浄化される。次

の段階が照明される。照明されるというのは、神の側

から照らされるということです。そして神によって完

成される。こういう三段階を経ていく。

浄化、照明、完成。これも一つのトリアスです。三

つで一つのものとなるわけです。既にお話ししまし

たようにヒエラルキアはディオニシオスが作った言

葉だと言われています。ヒエラルキアの目的は、でき

るだけ神に似ること、神と合一することです。これ

は先ほど説明しましたように、魂が肯定神学によって

ヒエラルキアの段階を経て神に近づいていくというこ

とです。

我々の最高能力である知性は、肯定神学において働

くときは積極的に知性を活発に活動させ、知性を研ぎ

澄ませて神に接近するわけです。しかし、刀折れ矢尽

きて破綻し、神の前に自らの活動を停止する。そこへ

至るわけです。つまり、知性は自己を否定することで

自己を超える。知性は知性ではないものとなるわけで

す。そのことを示した文章を引用します。

「我々の知性は、可知的対象を観るための知的能力を

持つてはいるが、しかし、自分の彼方にあるものと結

合されるあの合一によって知性の本性が乗り越えられ

るといふことを我々は知らなければならぬ。その合一によつて神のことは知られるのであり、それは我々のやり方ではなく、我々自身が完全に我々自身の外へ出て、まったく神の中に入ることによるのである。といふのも、自分自身であるよりも神のものとなることはよりよいことだからである。こうして神のものは神とともにあるものに与えられるのである」。

このように、知性は自分を完全に否定することで「自分自身であるよりも神のものとなる」ことによつて初めて神の次元領域に入つていける。神の次元領域は、「闇」といふ言葉で表現されます。その闇は完全な無言の次元である。無知性の次元である。この闇の中へ入つていく。それが神秘的合一と呼ばれる事態です。そこを述べた彼の言葉を読みます。

「神秘なる観照の対象に対して真剣に取り組むために、感覚作用と知性活動を捨て去り、感覚と知性で捉えうる一切のものを捨て去り、あらゆる非存在と存在を捨て去りなさい。そしてできる限り、あらゆる存在と知識を超えている合一へ無知によつて昇りなさい。

実際、あなたは、自分自身と一切のものからの完全に無条件で絶対的な脱自（エクスタシス）によつて、あなたが一切のものを除去するとともに一切のものから解放されることによつて、存在を超えている、神の闇の光へと引き上げられるであらう」。

「脱自」と訳したエクスタシス（英語でエクスタシー）、これが非常に重要です。先ほども触れましたが、神秘的合一体験について彼にはモデルがありました。それはモーセのシナイ山登攀について先輩のギリシャ教父たちの記した記述です。

「モーセは目に見える事物と「彼」を見ている人々から離れて、真に神秘なる無知の闇に入つて行く。この闇の中で彼はあらゆる認識による把握をやめて、まったく触れることも観ることもできないものに関わり、彼の全体は、あらゆるものの彼方のものであつてしかも何ものでもないものに属して、自分自身にも他のものにも属さないこととなり、あらゆる知識を無知により完全に静止させることでより高度な意味で一つになり、何も知らないことによつて知性を超えて知ること

になる」。

ここで注意しておきたいのは、こういう神秘的合一においては主体も対象も消滅します。ときどき、「ここは主体と対象が合一した場面だ」などと説明されることがありますが、それは完全に間違っています。この事態は認識と言えない。いわゆる「主体と対象の合一」などという言葉では言えないものです。ですから、見ることと知ることを超越したことです。だから、見ないこと、知らないこと、それこそが真に見ることであり、知ることである。そういうところです。

いま出てきた「脱自」ということについて、ディオニュシオスが説明した言葉がありまして、「神の愛は脱自的である」といわれている。神は万物を愛しているわけですが、その神の愛の働き方は本来的に脱自的なものだ、つまり、自分自身を超えて外に出るという性質のものだということです。「愛するものが自分自身に属することを許さず、自らを出て、愛されるものに属さしめる」。だから、愛するものの愛というのは、愛を発しているその人に留まっていることではないのだ、そ

の自分自身を超えて外へ出ていく、その愛するものの中へと愛が注がれていく、これが脱自だということです。

肯定神学において重要な概念にテオパネイア、ラテン語でテオファニア、つまり神現という概念がありますが、ディオニュシオスの場合は、神による万物の創造そのものが神現、神自身が現れることです。それから、神がつくった被造物、この世界のあらゆるものも神自身の現れ、神現だと言います。ところが彼は、「光は闇を隠す」と言います。つまり、神の現れとしての被造物、つまり、神現としての世界を我々が見るときに、我々はその中に神を見出すことはまずなくて、我々には神はかえって神現（世界）によって隠されてしまう。つまり、神は万物の中に現れてはいるけれども、だからといって我々が感覚的に事物を見たときそこに神を見出せるかという点と逆に見出すことはできない。逆に、感覚的事物の感覚性に囚われてしまっただけで、そこに現れているはずの神は感覚的事物の姿形の奥に隠れてしまふというわけです。だから、この世の光、つまりこの世に現れている一切のものは本当の光（神）を覆い隠し

てしまう。そういう逆説的な働きをしてしまう。

ディオニシオスが主張するのは、このように一切のものは神の現れだから、この世にあるどんなものもそれを探求していけばそこに神を見出せるはずだけれども、我々の感覚や知性は、逆に事物の被造性というか、事物性というか、そういうものに目を奪われて、そこに神が宿ることを見出せないでいる。神はこの世のあらゆるものに現れているけれども、神は常に隠れているというのです。神現という世界は神を包み隠す、という逆説が成り立つのです。

以上で終わらせていただきます。

(こん よしひろ／山梨大学名誉教授)

※2015年6月23日に行われました。